

平成 26 年 1 月 1 日以降の実績

平成 26 年 2 月 20 日 午後 3 時時点

1 号機

【原子炉への注水】

[平成 26 年]

- 1 月 17 日 午後 3 時 55 分、原子炉への注水量の変動が確認されたため、給水系からの注水量を約 2.6 m³/h から約 2.5 m³/h に調整、炉心スプレイ系からの注水量を約 2.1 m³/h から約 2.0 m³/h に調整。

【使用済燃料プール代替冷却】

※平成 23 年 8 月 10 日より、本格運用を実施。

[平成 26 年]

- 現時点で特記事項なし。

【滞留水の移送】

[平成 26 年]

- 1 号機タービン建屋地下→1 号機集中廃棄物処理建屋
1 月 13 日 午前 9 時 30 分～午後 4 時 42 分

【原子炉格納容器および原子炉圧力容器への窒素注入】

※平成 23 年 4 月 7 日より、原子炉格納容器への窒素封入を実施。

※平成 23 年 11 月 30 日より、原子炉圧力容器への窒素封入を実施。

[平成 26 年]

- 現時点で特記事項なし。

【原子炉格納容器ガス管理システム】

※平成 23 年 12 月 19 日より、原子炉格納容器ガス管理システムの本格運転を実施。

[平成 26 年]

- 現時点で特記事項なし。

【原子炉格納容器ガスサンプリング】

[平成 26 年]

※原子炉格納容器ガス管理システムのチャコールフィルタ・粒子状フィルタのサンプリングを計画的に実施。

【建屋ダストサンプリング】

[平成 26 年]

※原子炉建屋カバー排気フィルタ設備による原子炉建屋上部のダストサンプリングを計画的に実施。

【その他】

[平成 26 年]

- 1 月 31 日、海側遮水壁工事(港湾内)における遮水壁内側の埋め立てにより、1 号機スクリ

ーン室前面に設置したシルトフェンスが不要となることから、撤去を実施。

2 号機

【原子炉への注水】

[平成 26 年]

- 汚染水処理の負荷低減等を踏まえた原子炉注水量の低減操作として、2 号機の原子炉注水について、1 月 8 日 午前 10 時 17 分、炉心スプレイ系からの注水量を約 3.5 m³/h から約 3.0 m³/h へ変更(給水系からの注水量は約 2.0 m³/h で継続中)。
その後、冷却状態を確認し、問題がないことから、1 月 15 日 午前 10 時 20 分、炉心スプレイ系の注水流量を 3.0 m³/h から 2.5 m³/h へ変更(給水系からの注水量は約 2.0 m³/h で継続中)。
- 1 月 31 日 午前 10 時 34 分、原子炉への注水量の変動が確認されたため、炉心スプレイ系からの注水量を約 2.2 m³/h から約 2.5 m³/h に調整(給水系からの注水量は約 2.0 m³/h で継続中)。
- 2 号機原子炉注水については、今後の作業や工事において、炉心スプレイ系を停止して給水系で全量注水する対応が必要となることから、事前に給水系の全量注水試験を実施し、原子炉冷却状態への影響を確認することとしており、原子炉注水総量(4.5 m³/h)を維持しながら、段階的に炉心スプレイ系から給水系に乗せ替える操作を実施中。

2 月 6 日 午後 1 時 19 分、原子炉注水流量の調整を以下の通り実施。

炉心スプレイ系原子炉注水流量: 2.5 m³/h から 1.5 m³/h

給水系原子炉注水流量: 2.0 m³/h から 2.9 m³/h

2 月 12 日 午前 10 時 23 分、原子炉注水流量の調整を以下の通り実施。

炉心スプレイ系原子炉注水流量: 1.5 m³/h から 1.0 m³/h

給水系原子炉注水流量: 2.9 m³/h から 3.5 m³/h

2 月 17 日 午後 2 時 27 分、原子炉注水流量の調整を以下の通り実施。

炉心スプレイ系原子炉注水流量: 0.9 m³/h から 0.0 m³/h

給水系原子炉注水流量: 3.5 m³/h から 4.5 m³/h

なお、調整後の原子炉注水流量は安定しており、圧力容器底部温度等に有意な変動は確認されていない。

【使用済燃料プール代替冷却】

※平成 23 年 5 月 31 日より、本格運用を実施。

[平成 26 年]

- 平成 26 年 1 月 27 日 午前 10 時 38 分、2 号機使用済燃料プール代替冷却系について、電源切替のため冷却を停止(停止時プール水温度: 11.7℃)。その後、作業が終了したことから、同日 午前 11 時 48 分に使用済燃料プール代替冷却系を起動。なお、運転状態について異常なし。また、使用済燃料プール水温度は冷却停止時の 11.7℃から上昇はなく、運転上の制限値 65℃に対して余裕があり、使用済燃料プール水温度の管理上問題ない。

【滞留水の移送】

[平成 26 年]

- 2 号機タービン建屋地下→3 号機タービン建屋地下
平成 25 年 12 月 31 日 午前 9 時 34 分～平成 26 年 1 月 7 日 午前 9 時 25 分
1 月 12 日 午前 9 時 55 分～1 月 19 日 午前 9 時 28 分

- 1月 26 日午前9時 33 分～2月3日午前9時 27 分
- 2月 10 日午前 10 時～2月 18 日午前9時 28 分
- ・2号機タービン建屋地下→集中廃棄物処理施設(高温焼却炉建屋)
- 1月 19 日午前 10 時 12 分～1月 20 日午前9時 29 分

【原子炉格納容器および原子炉圧力容器への窒素注入】

- ※平成 23 年6月 28 日より、原子炉格納容器への窒素封入を実施。
- ※平成 23 年 12 月1日より、原子炉圧力容器への窒素封入を実施。
- [平成 26 年]
- ・現時点で特記事項なし。

【原子炉格納容器ガス管理システム】

- ※平成 23 年 10 月 28 日より、原子炉格納容器ガス管理システムの本格運転を実施。
- [平成 26 年]
- ・現時点で特記事項なし。

【原子炉格納容器ガスサンプリング】

- [平成 26 年]
- ※原子炉格納容器ガス管理システムのチャコールフィルタ・粒子状フィルタのサンプリングを計画的に実施。

【建屋ダストサンプリング】

- [平成 26 年]
- ※2号機原子炉建屋排気設備でのダストサンプリングを計画的に実施。

【その他】

- [平成 26 年]
- ・平成 26 年1月 28 日より、2号機の燃料取り出し計画検討のため、原子炉建屋オペレーティングフロア内の現場調査を実施。
- ・2月 18 日、2号機原子炉圧力容器温度計(TE-2-3-69R)の点検において、絶縁抵抗測定を実施したところ、0オーム(Ω)を指示することを確認。その後の評価により、温度計に短絡が発生しているものと推定され、原子炉圧力容器温度監視機能を發揮できていない状態と判断。
- 原因として、絶縁抵抗測定時に誤った電圧を印加したことにより、当該温度計に影響を与えた可能性が否定できないことから、今後、対策について検討することとし、当該温度計については交換のための準備を進める。なお、当該温度計は原子炉圧力容器底部温度を監視していたが、近傍にある温度計(TE-2-3-69H3)により監視することが可能。

3号機

【原子炉への注水】

- [平成 26 年]
- ・1月 14 日午前 10 時 41 分、3号機原子炉建屋1階における無人重機による障害物等の撤去作業において、原子炉注水系の炉心スプレイ系注水ライン近傍での作業を行うことから、

念のため、炉心スプレイ系からの注水を停止し、給水系による全量注水への切替操作を実施。

炉心スプレイ系原子炉注水流量:3.5 m³/h から 0 m³/h

給水系原子炉注水流量:1.8 m³/h から 5.5 m³/h

1月 30 日午後1時 38 分、作業終了に伴い3号機原子炉注水量については、変更前の流量に戻す操作を実施。

炉心スプレイ系原子炉注水流量:0 m³/h から 3.5 m³/h

給水系原子炉注水流量:5.5 m³/h から 2.0 m³/h

- ・汚染水処理の負荷低減等を踏まえた原子炉注水量の低減操作として、3号機の原子炉注水について、2月4日午前 10 時 12 分、炉心スプレイ系からの注水量を約 3.4m³/h から約 3.0m³/h へ変更(給水系からの注水量は約 2.0m³/h で継続中)。
- ・汚染水処理の負荷低減等を踏まえた原子炉注水量の低減操作として、3号機の原子炉注水について、2月 12 日午前 10 時 37 分、炉心スプレイ系からの注水量を約 3.0m³/h から約 2.5m³/h へ変更(給水系からの注水量は約 2.0m³/h で継続中)。なお、調整後の原子炉注水流量は安定しており、圧力容器底部温度等に有意な変動は確認されていない。

【使用済燃料プール代替冷却】

- ※平成 23 年7月1日より、本格運用を実施。
- [平成 26 年]
- ・現時点で特記事項なし。

【滞留水の移送】

- [平成 26 年]
- ・3号機タービン建屋地下→集中廃棄物処理施設(高温焼却炉建屋)
- 平成 25 年 12 月 17 日午後4時～平成 26 年1月 21 日午前9時 14 分
- ・3号機タービン建屋地下→集中廃棄物処理施設(高温焼却炉建屋)
- 1月 24 日午後 2 時 37 分～

【原子炉格納容器および原子炉圧力容器への窒素注入】

- ※平成 23 年7月 14 日より、原子炉格納容器への窒素封入を実施。
- ※平成 23 年 11 月 30 日より、原子炉圧力容器への窒素封入を実施。
- [平成 26 年]
- ・現時点で特記事項なし。

【原子炉格納容器ガス管理システム】

- ※平成 24 年3月 14 日より、原子炉格納容器ガス管理システムの本格運転を実施。
- [平成 26 年]
- ・現時点で特記事項なし。

【原子炉格納容器ガスサンプリング】

- [平成 26 年]
- ※原子炉格納容器ガス管理システムのチャコールフィルタ・粒子状フィルタのサンプリングを計画的に実施。

【建屋ダストサンプリング】

- [平成 26 年]
- ※原子炉建屋上部のダストサンプリングを計画的に実施。

【3号機原子炉建屋5階中央部近傍（機器貯蔵プール側）での湯気発生状況】

湯気の有無をカメラで確認した日時、至近の気象データは以下の通り

- ・1月2日午前7時 44 分頃、湯気発生を確認(午前7時 40 分時点の気象データは、気温 3.9℃、湿度 91.2%)。1月3日午前7時 42 分頃、湯気が確認されなくなった(午前7時 40 分時点の気象データは、気温 1.4℃、湿度 67.7%)。
- ・1月9日午前7時 51 分頃、湯気発生を確認(午前7時 50 分時点の気象データは、気温 3.8℃、湿度 94.2%)。1月12日午前7時 55 分頃、湯気が確認されなくなった(午前8時時点の気象データは、気温 2.1℃、湿度 67.3%)。
- ・1月 16 日午前7時 53 分頃、湯気発生を確認(午前7時 50 分時点の気象データは、気温 -1.1℃、湿度 86.0%)。1月 17 日午前8時 15 分頃、湯気が確認されなくなった(午前8時 20 分時点の気象データは、気温 1.7℃、湿度 74.6%)。
- ・1月 18 日午前8時 20 分頃、湯気発生を確認(午前8時 20 分時点の気象データは、気温 1.2℃、湿度 83.2%)。1月 19 日午前8時 15 分頃、湯気が確認されなくなった午前8時 10 分時点の気象データは、気温 2.0℃、湿度 74.5%)。
- ・平成 26 年2月9日午前8時 15 分頃、3号機原子炉建屋5階中央部近傍より、湯気が発生していることをカメラにて確認。同日午前8時 24 分時点のプラント状況、モニタリングポストの指示値等に異常は確認されていない(午前8時 20 分時点の気象データは、気温 1.9℃、湿度 94.0%)。その後、2月 12 日午前8時 15 分頃には、湯気が確認されなくなった。なお、同日午前8時 22 分時点におけるプラント状況、モニタリングポスト指示値に異常は確認されていない。(午前8時 20 分時点の気象データは、気温 2.6℃、湿度 62.7%)。

【その他】

[平成 26 年]

- ・1月 18 日午後2時 40 分頃、3号機原子炉建屋瓦礫撤去用ロボットのカメラ画像を確認していた当社社員が、3号機原子炉建屋1階北東エリアの主蒸気隔離弁室の扉付近から、水が、当該扉近傍に設置されている床ドレンファンネル(排水口)に幅約 30cm で流れ込んでいることを発見した。
当該漏えい水は、原子炉建屋最地下階の床ドレンサンプへつながる床ドレンファンネルへ流入しており、原子炉建屋外への流出はない。なお、モニタリングポスト指示値の有意な変動、およびプラントパラメータ(原子炉注水流量、原子炉圧力容器底部温度、格納容器内温度等)の異常は確認されていない。当該漏えい箇所の雰囲気線量は約 30mSv/h。
漏えい水の分析結果および水温は以下のとおり。

【漏えい水の放射能分析結果:採取日1月 19 日】

- ・セシウム 134: 7.0×10^2 Bq/cm³
- ・セシウム 137: 1.7×10^3 Bq/cm³
- ・コバルト 60: 2.5×10^1 Bq/cm³
- ・全ベータ: 2.4×10^4 Bq/cm³

<参考>

【原子炉に注水している水の至近の放射能分析結果:採取日平成 25 年 12 月 10 日】

- ・セシウム 134: 検出限界値未満
- ・セシウム 137: 検出限界値未満

- ・コバルト 60: 検出限界値未満
- ・全ベータ: 2.8 Bq/cm³

【漏えい水の温度測定結果:1月 19 日午後5時頃測定】

- ・約 20℃

<参考>

- ・漏えい確認箇所における雰囲気温度は約7℃(1月 19 日午前 10 時頃測定)
- ・原子炉に注水している水の温度は約7℃(1月 19 日午後5時頃測定)

当該漏えい水は、原子炉に注水している水に比べて放射能濃度が高く、水温も高いことから、原子炉に注水している水の直接漏えいによるものではないと考えている。
引き続き、漏えいの原因等について調査を行う。
その後、1月 21 日午後1時 20 分、カメラ映像にて、流量がこれまでに確認されている量から大幅に低下していることを確認した。なお、午後1時 47 分現在において、プラントパラメータ(原子炉注水流量、原子炉圧力容器底部温度、格納容器内温度等)の有意な変化は確認されていない。引き続き、漏えい原因や漏えい流量の変化等について調査を行う。

4号機

【使用済燃料プール代替冷却】

※平成 23 年7月 31 日より、本格運用を実施。

[平成 26 年]

- ・1月 14 日午前 11 時 19 分、4号機使用済燃料プール代替冷却系について、当該系の循環冷却設備弁点検作業のため冷却を停止(停止時プール水温度: 15.5℃)。その後、作業が終了したことから、同日午後4時 41 分に使用済燃料プール代替冷却系を起動。なお、運転状態について異常なし。また、使用済燃料プール水温度は停止時の 15.5℃から 15.7℃まで上昇したが、運転上の制限値(65℃)に対して、使用済燃料プール水温度管理上問題なし。

【その他】

[平成 26 年]

- ・1月 19 日午後7時5分頃、4号機使用済燃料プール代替冷却系に接続設置しているモバイル塩分除去装置において、「塩分除去装置ユニット漏えい検知」警報が発生。警報発生時、当該装置は停止しており、4号機使用済燃料プール代替冷却系と切り離された状態であった。また、4号機の使用済燃料プール水温度、プラントパラメータの異常は確認されていない。
現場状況を確認したところ、モバイル塩分除去装置を積載している車輛上の堰内に2箇所の水溜まり(約1m×約1m×深さ約3mm、約 0.3m×約 0.3m×深さ約1mm、2箇所合計の漏えい量は約 3.1 リットル)を発見。漏えい水は当該堰内に留まっており、堰外には流出しておらず、漏えいは停止している。
その後、引き続き漏えい箇所の調査を行っていたところ、同日午後9時50分頃、新たに高圧ポンプから7秒に1滴程度の漏えいを発見。高圧ポンプからの漏えい水はモバイル塩分除

去装置を積載している車輛上の堰内に留まっており、堰外には流出していない。

漏えい水の分析結果より、4号機使用済燃料プール水の分析結果(平成25年10月17日採水)と同程度であることから、過去にモバイル塩分除去装置運転時に通水した使用済燃料プール水が漏えいしたものと考えている。1月20日、モバイル塩分除去装置の水抜きを行い、同日午後7時に漏えいが停止した。今後、高圧ポンプの分解点検等を行う。なお、現在までの漏えい量は約7.7リットルであり、漏えい水の放射エネルギーは約 1.3×10^5 Bqと評価している。

5号機

【滞留水の移送】

[平成26年]

・現時点で特記事項なし。

【その他】

[平成26年]

・1月6日午後10時21分頃、5号機タービン建屋1階をパトロールしていた当社社員が、発電機の冷却に使用する固定子冷却水系において、冷却水配管に取りつけられている安全弁の配管より水が漏えいしていることを発見。同時刻に至近の弁を閉めることで、漏えいが止まったことを確認。なお、固定子冷却水系で使用される水は純水を使用しており、漏えいした水は汚染水ではない。漏えい範囲は以下のとおり。

堰内:約2m×約4m、深さ約10cmで漏えい量は約800リットル

堰外:約5m×約5m、深さ約5mmで漏えい量は約125リットル

当該の漏えいについての主要要因と応急対策は以下のとおり。

【主要要因】

タービン建屋補機冷却系熱交換器(A)の本格点検に必要な洗浄水の確保のため、固定子冷却水系補給水(純水)ラインの入口弁を「全開」とした。その後、5・6号機スイッチギア空調膨張タンク補給のために純水移送ポンプを起動した際に、固定子冷却水系補給水(純水)ラインにも圧力がかかり、当該ラインにある安全弁に設定圧以上の圧力がかかったことから当該安全弁が動作し、水漏れが発生。今回の漏えいは、タービン建屋補機冷却系熱交換器(A系)の本格点検に必要な洗浄水を確保するためのライン構成にあたり、当該安全弁の確認が不足していたために生じた。

【応急対策】

- ・固定子冷却水系補給水(純水)ラインの入口弁に、安全弁動作の注意喚起を促す注意札を取り付ける。
- ・タービン建屋補機冷却系熱交換器(A)本格点検の洗浄水ラインを、固定子冷却系補給水(純水)ラインから別ラインに変更。
- ・提出されている作業許可書については、安全処置の総点検・類似要因を確認。

・使用済燃料プール水の透明度が悪く、燃料取り出し作業に影響を与える可能性があること

から、使用済燃料プール内の燃料取り出し準備作業として使用済燃料プール水の一部を入れ替えるため、2月6日午前9時14分、使用済燃料プール冷却を停止(停止時の使用済燃料プール水温度は、15.5℃)。同日午前9時21分、原子炉水冷却(残留熱除去系原子炉停止時冷却モード(SHC))を停止(停止時の原子炉水温度は、32.8℃)。

また、2月6日、使用済燃料プール内にて仮設浄化装置によるプール水の浄化を開始。その後、作業が終了したことから、原子炉水冷却および使用済燃料プール冷却をそれぞれ起動した。起動実績は以下のとおり。

〈原子炉水冷却〉

・起動時間:2月6日午後6時6分

・原子炉水温度は停止時の32.8℃から35.4℃まで上昇したが、運転上の制限値(100℃)に対して余裕があり、原子炉水温度の管理上問題なかった。

〈使用済燃料プール冷却〉

・起動時間:2月6日午後5時50分

・使用済燃料プール水温度は冷却停止時の15.5℃から15.6℃まで上昇したが、運転管理上の制限値(65℃)に対して余裕があり、使用済燃料プール水温度の管理上問題なかった。

・2月19日午後2時55分頃、5号機タービン建屋地下1階にある漏えい検知器(タービン建屋南西側立坑ピット)が動作したことを示す警報が発生。当該検知器はタービン建屋地下1階に設置されており、タービン建屋外部にあるトレンチ内に入り込んだ水を、タービン建屋内に配管を通じて導き、容器で受けて検知するもの。

現場を確認し、受け容器内に溜まった水を排水したところ、水の流れは停止したことから、漏えいの継続はないことを確認。溜まった水は建屋内からの漏えい水ではなく、雨水または地下水と判断。当該漏えい検知器の受け容器内の水を排水したことにより、同日午後3時6分に同警報は解除された。

6号機

【滞留水の移送】

[平成26年]

※タービン建屋地下から仮設タンクへの移送を適宜実施中。

【その他】

[平成26年]

・現時点で特記事項なし。

共用プール

[平成26年]

※使用済燃料プール冷却浄化系運転中。

※4号機使用済燃料プールから共用プールへの燃料移動作業において発生する構内用輸送容器(キャスク)内包水(4号機使用済燃料プール水)および構内用輸送容器(キャスク)内洗浄水については、沈降分離処理し、共用プール低電導度廃液受タンクで貯水しており、

当該タンクレベルが高くなったら、適宜滞留水処理施設（集中廃棄物処理施設（高温焼却炉建屋）など）へ移送を実施。

（平成 26 年 1 月 28 日午前 10 時 4 分～午後 1 時 49 分実施）

【その他】

[平成 26 年]

・現時点で特記事項なし。

水処理装置

【セシウム除去設備】

[平成 26 年]

・1月6日午前 11 時 50 分頃、第二セシウム吸着装置（サリー）B系セシウム吸着塔下部の配管付け根部分に、微量のにじみをパトロール中の福島第一原子力規制事務所の原子力保安検査官が発見。その後、にじみの状況に変化がないことから、現状では追加的な漏えいはないものと判断。また、当該箇所付近の表面線量測定を実施した結果、当該吸着塔が設置されているエリアにおける雰囲気線量（バックグラウンド）と同等の値であることを確認。

【線量測定結果】

当該箇所の表面線量測定値：約 0.10mSv/h（ガンマ線）

約 0.03mSv/h（ベータ線：70 μ m 線量当量率）

雰囲気線量測定値：約 0.025mSv/h（ガンマ線）

約 0.00mSv/h（ベータ線：70 μ m 線量当量率）

にじんでいた水について、スマヤろ紙に吸着させ測定を実施した結果、約 4,000cpm を検出。この測定結果は床面の放射性物質による影響も考えられることから、再測定を行い、雨水による影響を含めて確認する。

1月7日、あらためて当該部の表面線量測定を実施したところ、雰囲気線量（バックグラウンド）と同等であり、汚染水の漏えいではないことを確認。また、当該部についてスマヤろ紙による再測定を実施し、300cpm であることを確認。なお、にじみ痕等の状況については、同日、再度現場確認を行い、変化がないことを確認。以上のことから、にじみのあった水は当該吸着塔を使用前に屋外に保管していた際に、遮へい容器の隙間部から浸入した雨水と判断。今回のにじみは吸着材容器の健全性に影響するものではないが、雨水浸入防止の観点から以下の通り対策を実施する。

1. 使用済み吸着塔を優先して、遮へい容器の隙間部のコーキング処理を実施する。
2. 未使用の吸着塔についても、隙間部のコーキング未実施のものについて、コーキング処理を実施する。
3. 新製の吸着塔については、製作にあわせて雨水浸入部のコーキング処理を継続して実施する。

【多核種除去設備（ALPS）】

[平成 26 年]

・1月7日、多核種除去設備（ALPS）B系の高性能容器（HIC）の交換作業を実施中、当該作業用クレーンに走行不具合が発生したため、原因調査を実施していた。その後、1月9日に当該クレーンの走行モータ4台の内、1台に異常を確認。当該クレーンについては、異常が確認されたモータを含む2台を除外した状態で走行できることを確認したことから、今後、

循環待機運転中のA・C系については、HICの交換作業を行った後、処理運転に移行する。なお、異常を確認した走行モータについては、今後、取り替えなどの処置を行う予定。

その後、C系のHIC交換作業が終了したことから1月 10 日午後3時 37 分に、A系のHIC交換作業が終了したことから同日午後8時 13 分に、それぞれ循環待機運転から処理運転に移行。なお、処理運転後の状態に異常がないことを確認。

B系においてHIC交換を含むフィルタ洗浄が終了したことから、1月 11 日午後2時 36 分に処理運転を開始。また同時刻において、C系を処理運転から循環待機運転に移行。なお、B系の運転状態に異常がないことを確認。

1月 23 日午後1時 40 分、異常を確認した走行モータの取り替えが終了し、当該クレーンは、4台の走行モータによる運転に復帰した。

【淡水化装置】

[平成 26 年]

・現時点で特記事項なし。

タンクからの水の漏えい関連

・H4エリア I グループ No.5タンクからの漏えいを受け、同様の構造のタンクの監視、および詳細な調査を継続実施中。

【タンクパトロール結果】

[平成 26 年]

< 特記事項 >

・1月 12 日午前9時 13 分頃、汚染水タンクパトロールにおいて、G4南タンクエリア内堰内基礎の目地シールの一部が剥がれていることを、協力企業作業員が発見。当該堰内水位は、1月 11 日午後4時頃に行ったパトロール後から1月 12 日午前9時頃にかけて、7cmから3cmに低下しており、当該目地シールの剥がれ箇所より堰内水が漏えいしていると判断。1月 12 日午前9時頃までの堰内水漏えい量は、約 50m³と推定。

1月 12 日午前9時 48 分、当該堰内水を当該エリア内タンクへのくみ上げを開始。当該タンクエリア内のタンク内水位の低下は確認されていない。

1月 12 日午前 10 時 55 分、当該堰内の目地シール剥がれ箇所については、エポキシ系樹脂の充填による補修が完了。今後、堰内水位の変動を確認するため、同日午前 11 時 10 分、当該堰内水の同エリアタンクへのくみ上げを停止。

当該堰内水のストロンチウム 90 の分析結果が、1月 12 日午前9時 50 分の採水値で 5.9 Bq/L、平成 25 年 12 月 26 日採水値で 2.7 Bq/L でほぼ安定していること、当該タンクエリア内のタンク内水位の低下が確認されていないことから、漏えいした当該堰内水は雨水であると判断。なお、1月 12 日午後2時頃の当該堰内水位は3cm（同日午前9時頃の水位から変化なし）であることから、堰内水の漏えい量は約 50m³のままであると推定。

1月 12 日午前 10 時 55 分に当該漏えい箇所の修理を完了後、漏えい確認（当該堰内水位の低下確認）を行っていたが、1月 13 日午前9時 34 分においても当該堰内水位は3cm（1月 12 日午前9時頃の水位から変化なし）であることから、漏えいは停止したものと判断。

・2月9,10日のパトロールにおいて、目視点検により漏えい等がないこと(降雪や凍結により漏えい確認ができない箇所を除く)、汚染水タンク水位計による常時監視(警報監視)においても異常がないことを確認。

・2月11日午後0時20分頃、汚染水タンクパトロールにおいてH4タンクエリア堰内の床コンクリート部に、目視で確認できる範囲で長さ1.5m程度の亀裂を協力企業作業員が発見。2月8日(降雪前)の当該堰内水位は0cmであることを確認しているが、堰内には積雪があり、亀裂箇所から水がはけることを確認したことから、念のため当該堰内水の分析を実施。また、同日午後3時35分頃、H4東タンクエリアの堰内床コンクリート部に8m程度の亀裂があることを協力企業作業員が確認。亀裂部付近に水はなく、亀裂部への水の流入は確認されていない。堰内の水の分析結果については、以下のとおり。

<H4タンクエリア:午後3時28分採水>

・セシウム134 : 検出限界値未満(検出限界値:12 Bq/L)

・セシウム137 : 検出限界値未満(検出限界値:17 Bq/L)

・ストロンチウム90 : 17 Bq/L

<H4東タンクエリア:午後4時27分採水>

・セシウム134 : 13 Bq/L

・セシウム137 : 45 Bq/L

・ストロンチウム90 : 2,100 Bq/L

同日、H4およびH4東タンクエリア堰内床コンクリート部の亀裂について、エポキシ系塗料による補修が終了。H4およびH4東タンクエリア堰内の当該亀裂部付近に水はなく、亀裂への水の流入は確認されなかった。また、H4タンクエリアの亀裂について亀裂周辺の雪を取り除いて確認したところ、亀裂の長さは約12mであることを確認。

また、H4およびH4東タンクエリアの各タンクの目視点検において漏えい等は確認できず、汚染水タンク水位計による常時監視(警報監視)においても異常はなかった。

なお、H4エリア周辺地下水(F-1:当該タンクエリア上流部、E-11及びE-12:当該タンクエリア下流部)の分析結果については、以下の通り。

<E-11(当該タンクエリア下流部):2月12日採水>

・全ベータ : 25 Bq/L

・トリチウム: 1,000 Bq/L

<E-12(当該タンクエリア下流部):2月12日採水>

・全ベータ : 検出限界値未満(検出限界値:17 Bq/L)

・トリチウム: 2,900 Bq/L

<F-1(当該タンクエリア上流部):2月11日採水>

・全ベータ : 検出限界値未満(検出限界値:17 Bq/L)

・トリチウム: 660 Bq/L

当該タンクエリア周辺の地下水の上流部、下流部共に前回と比較して有意な変動はない。

・2月16日午前9時15分頃、タンクエリアパトロールにおいて、H5タンクエリア堰内に溜まった水が堰外に漏えいしていることを協力企業パトロール員が発見。漏えい箇所および状況は以下の通り。

・H5タンクエリア西側堰の嵩上げた鋼製堰の配管貫通部(2箇所)。漏えい量は鉛筆の芯1本程度と指の太さで4本分程度。

・H5タンクエリア西側堰のコンクリート堰と嵩上げた鋼製堰の継ぎ目部(1箇所)。漏えい量は1秒に1滴程度。

同日午前10時45分、H5タンクエリア西側堰の嵩上げた鋼製堰の配管貫通部からの漏えい箇所(2箇所)に、漏えい水を受けるための容器を設置。なお、配管貫通部からの漏えい箇所については、コーキング処理にて補修を行い、漏えい量は、指の太さで4本分程度の箇所が1秒に3滴程度、鉛筆の芯1本程度の箇所が1秒に1滴程度に減少。

同日午前11時10分、H5タンクエリア堰内水をH6タンクエリア堰内へ移送を開始。さらに、午後0時30分、4000t ノッチタンク群へ移送を開始。

また、同日午前11時20分頃、昼のタンクパトロールにおいて、新たにH5タンクエリア堰内に溜まった水の堰外への漏えい箇所(4箇所)を、協力企業パトロール員が発見。

・H5タンクエリア東側堰の嵩上げた鋼製堰の配管貫通部(1箇所)。漏えい量は1秒に5滴程度。

・H5タンクエリア西側堰の嵩上げた鋼製堰の配管を貫通されるための開口部の閉止箇所(1箇所)。漏えい量は鉛筆の芯1本程度。その後、コーキング処理にて補修を行い、1秒に2滴程度に減少。

・H5タンクエリア東側堰のコンクリート堰と嵩上げた鋼製堰の継ぎ目部(2箇所)。漏えい量は1秒に3滴程度と2秒に1滴程度。

・H5タンクの水位については、有意な変動がなく、タンクからの漏えいはないと考えており、堰からの漏えい水は、降雪および雨水と判断。

同日午後3時30分頃、H5タンクエリア堰内水の移送により堰内水位が漏えい箇所より低下したことから、漏えいが停止したことを確認。漏えい量は最大で約19.2m³と推定。

なお、H5タンクエリア堰内水の移送実績は以下のとおり。

・H6タンクエリア堰内への移送:午前11時10分～午後1時5分

・4000t ノッチタンク群への移送:午後0時30分～午後4時50分

・2月19日、午後11時25分頃、タンクエリアパトロールにおいて、H6エリアに設置されているタンクの上部より水が垂れ落ちていることを協力企業作業員が発見。現場を確認した結果、タンク上部天板部のフランジ部より水が漏えいしており、上部天板部から漏えいした水は雨樋を伝わり堰外へ流出していることを確認。近くに排水路がないことから、海への流出はないと考えている。

漏えいしている水の表面線量率を測定したところ、70μm線量当量率は50mSv/h(ベータ線)、1cm線量当量率は0.15mSv/h(ガンマ線)。漏えいした原因については、今後調査を実施。

その後の現場確認の結果、当該タンクの受入弁(2箇所)が開状態になっていたことから、当該弁を全閉にし、漏えい量が減少したことを確認。また、滴下箇所については、ビニールで養生し、漏えい水を受けている。

本件については、2月20日午前0時43分に核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律第62条の3に基づき制定された、東京電力株式会社福島第一原子力発電所原子炉施設の保安及び特定核燃料物質の防護に関する規則第18条第12号「発電用原子炉施設の故障その他の不測の事態が生じたことにより、核燃料物質等(気体状のものを除く)が管理区域内で漏えいしたとき。」に該当すると判断。

漏えいを止める措置として、同日午前3時30分にH6タンクエリアの当該タンク群間の連結弁を開けて当該タンク水位を下げる操作を実施。その後、午前5時40分に漏えいが停止したことを確認。当該タンク水位は、上部天板部より47cmの位置まで低下。

H6エリアタンク漏えい水および堰内水の分析結果は以下のとおり。

H6エリアタンク雨樋水(2月 20 日採取)

- ・セシウム 134 : 3,800 Bq/L
- ・セシウム 137 : 9,300 Bq/L
- ・コバルト 60 : 1,800 Bq/L
- ・マンガン 54 : 1,300 Bq/L
- ・アンチモン 125: 41,000 Bq/L
- ・全ベータ :230,000,000 Bq/L

H6エリア堰内水(2月 20 日採取)

- ・セシウム 134 : 42 Bq/L
- ・セシウム 137 : 130 Bq/L
- ・コバルト 60 : 35 Bq/L
- ・マンガン 54 : 22 Bq/L
- ・アンチモン 125: 620 Bq/L
- ・全ベータ :3,000,000 Bq/L

(参考)淡水化処理装置濃縮水(1月 14 日採取)

- ・セシウム 134 : 検出限界値未満(検出限界値:1,000 Bq/L)
- ・セシウム 137 : 2,600 Bq/L
- ・コバルト 60 : 3,400 Bq/L
- ・マンガン 54 : 検出限界値未満(検出限界値:450 Bq/L)
- ・アンチモン 125: 18,000 Bq/L
- ・全ベータ :55,000,000 Bq/L

【H4エリアタンクにおける水漏れに関するサンプリング結果】

・H4エリア I グループ No.5タンクからの漏えい、およびB南エリアタンク(B-A5)上部天板部からの滴下を受け、福島第一南放水口付近、福島第一構内排水路、H4エリアタンク周辺および地下水バイパス揚水井 No.5~12 のサンプリングを継続実施中。

[平成 26 年]

南放水口・排水路 (T-2、C-1、X-2、X-1、C-1-1、B-1、B-2、B-3、B-0-1、C-0、C-2)

<特記事項>

- ・1月 14 日に採取したB排水路(C排水路合流点前[B-3])のセシウム濃度が前回と比較して 10 倍を超過していることが確認された。原因としては、当該試料が濁っていることから、排水路に蓄積していた土壌が影響したものとされる。なお、その他ポイントの分析結果については、前回と比較して有意な変動は確認されていない。
- ・2月 9、10 日の福島第一南放水口付近および福島第一構内排水路、2月 9 日のH4エリア周辺については、積雪による影響のため採取できていない。
- ・C排水路のC-1-1のセシウム 137(2月 15 日採取:220Bq/L)および全ベータ(2月 15 日採取:140Bq/L)、C-2の全ベータ(2月 15 日採取:170Bq/L)、B排水路のB-0-1の全ベータ(2月 15 日採取:200Bq/L)の値において、これまでの当該箇所における最高値以下および多少超過している範囲ではあるが、前日採取した測定結果(いずれも検出限界値未満)と比較して有意な上昇が確認された。測定値が上昇した原因については、降雨により排水路周辺の汚れが流入したものと考えている。
- ・B排水路のB-3の全ベータ(2月 16 日採取:1,100Bq/L)の値において、これまでの当該箇

所における最高値以下ではあるが、前日採取した測定結果と比較して有意な上昇が確認された。また、2月 16 日採取のC排水路のC-1-1およびC-2の全ベータの値も、前日採取した測定結果に引き続き、上昇が確認されている。なお、2月 16 日採取のB排水路のB-0-1の全ベータは前日採取した測定結果より低下している。測定値が上昇した原因については、降雨により排水路周辺の汚れが流入したものと考えている。

H4エリア周辺地下水 (E-1~E-10、E-12、ウェルポイント、F-1)

<特記事項>

- ・平成 25 年 12 月 30 日採取のH4エリア周辺地下水E-1のトリチウム値が、同年 12 月 29 日の 330,000 Bq/L から 420,000 Bq/L に上昇しているが、当該地点においては、12 月上旬に数日間、450,000 Bq/L 前後のトリチウムが検出されており、今後も、監視を継続していく。
- ・H4エリア周辺観測孔E-1にて1月 8 日に採取した地下水のトリチウム分析値が、1月 7 日採取分の 360,000 Bq/L から 17,000 Bq/L に低下。これは近傍ウェルポイントの地下水くみ上げの影響によるものと考えられる。
- ・H4エリア周辺観測孔E-1にて1月 11 日に採取した地下水のトリチウム分析値が、1月 10 日採取分の 32,000 Bq/L から 200,000 Bq/L に上昇しているが、過去の変動の範囲内である。
- ・1月 23 日、H4エリアタンク周辺の地下水観測孔E-12 のサンプリングを実施(初採取)。
- ・2月 5 日、H4エリアタンク周辺の地下水観測孔E-11 のサンプリングを実施(初採取)。
- ・H4エリアタンク周辺のE-1の全ベータ(2月 16 日採取:220,000Bq/L)の値において、これまでの当該箇所における最高値以下ではあるが、前日採取した測定結果と比較して有意な上昇が確認された。測定値が上昇した原因については、降雨により地下水が上昇し、周辺の汚染が流入しやすくなったものと考えている。
- ・H4エリアタンク周辺のE-1のトリチウムの値(2月 16 日採取:170,000Bq/L)において、これまでの当該箇所における最高値以下ではあるが、前回の測定結果(2月 15 日採取:33,000Bq/L)と比較して有意な上昇が確認された。また、E-3のトリチウムの値(2月 16 日採取:250Bq/L)は、前回の測定結果(2月 15 日採取:1,900Bq/L)と比較して低下。変動の原因としては、2月 15 日の降雨による影響と考えている。
- ・H4エリアタンク周辺のE-9の全ベータの値(2月 17 日採取:500Bq/L)において、これまでの当該箇所における最高値以下ではあるが、前回の測定結果(2月 14 日採取:17Bq/L)と比較して有意な上昇が確認された。変動の原因としては、2月 15 日の降雨による影響と考えている。
- ・H4エリアタンク周辺のE-9の全ベータの値(2月 19 日採取:6,100Bq/L)において、前回の測定結果(2月 17 日採取:500Bq/L)と比較して 10 倍を超過していることを確認。
<地下水観測孔[E-9]の分析結果(2月 19 日採取分)>
 - ・全ベータ: 6,100 Bq/L<地下水観測孔[E-9]の分析結果(2月 17 日採取分)>
 - ・全ベータ: 500 Bq/L(参考)【これまでの最高値】
<地下水観測孔[E-9]の分析結果(平成 25 年 12 月 27 日採取分)>
 - ・全ベータ: 730 Bq/L原因としては、2月 15 日の大雨で地下水が上昇するとともに、E-9付近は現在汚染土壌回収のため掘削作業中であり、周囲の汚染が流れ込み易い状況にあったものと想定。その他の分析結果については、前回採取した測定結果と比較して大きな変動は確認されていない。

【H4エリア周辺のウェルポイント汲み上げ実績】

[平成 26 年]

・現時点で特記事項なし。

【その他】

[平成 26 年]

・現時点で特記事項なし。

地下貯水槽からの漏えい関連

【地下貯水槽に関する水のサンプリング結果】

[平成 26 年]

<特記事項>

- 平成 26 年1月 30 日、地下貯水槽 No.1～3における貯水槽内部には、残水の希釈や漏えい検知孔等からの汲み上げ水を移送していたことにより、残水が溜まっていることから、H1 東エリアタンクへの残水の移送を開始。
残水量については、地下貯水槽No.1が約950m³、地下貯水槽No.2が約700m³、地下貯水槽 No.3が約 150m³。
- 平成 26 年2月9日は、積雪による影響のため採取できていない。

タービン建屋東側の地下水調査関連

- 1～4号機タービン建屋東側に観測孔を設置し地下水を採取、分析しており、平成 25 年6 月 19 日、1、2号機間の観測孔において、トリチウムおよびストロンチウムが高い値で検出されたことを公表し監視強化するとともに、1、2号機タービン建屋東側に設置したウェルポイントおよび集水ピット(南)から地下水をくみ上げ中。
平成 25 年 11 月 27 日に採取した2、3号機取水口間ウェルポイント北側における分析結果で全ベータが高い値で検出されたことから、今後、計画的に2、3号機東側に設置したウェルポイントから地下水のくみ上げを実施。

【地下水観測孔のサンプリング結果】

[平成 26 年]

<特記事項>

- 1月 27 日、1～4号機タービン建屋東側の地下水観測孔 No.1-10 のサンプリングを実施(初採取)。
- 1月 29 日、1、2号機間護岸エリア地下水観測孔 No.1-16 近傍に設置した地下水汲み上げ用の孔 (No.1-16(P)) の地下水の汲み上げおよび汲み上げ水の核種分析を実施(初採取)。
 - ・セシウム 134: 検出限界値未満(検出限界値:0.42 Bq/L)
 - ・セシウム 137: 検出限界値未満(検出限界値:0.52 Bq/L)
 - ・全ベータ : 検出限界値未満(検出限界値:18 Bq/L)

地下水観測孔 No.1-16(P)については、全ベータ濃度が高い地下水観測孔 No.1-16 の近傍の井戸であるのに対して、検出限界値未満であるが、汲み上げ水の移送配管敷設時のリークチェックに使った残水を採水している可能性等が考えられることから、1月 30 日、再度サンプリングを実施。

[地下水汲み上げ用の孔 No.1-16(P)からの汲み上げ水の分析結果:1月 30 日採取分]

- ・セシウム 134: 検出限界値未満(検出限界値:2.1 Bq/L)
- ・セシウム 137: 検出限界値未満(検出限界値:1.0 Bq/L)
- ・アンチモン 125:10 Bq/L
- ・全ベータ :1,700,000 Bq/L
- ・トリチウム :41,000 Bq/L

全ベータの測定結果が、地下水観測孔 No.1-16 と同程度であることが確認されたので、今後、No.1-16(P)により汲み上げを実施する。

その他の分析結果については、前回採取した測定結果と比較して大きな変動は確認されていない。

- ・2月6日、地下水観測孔 No.1-6 のサンプリングを実施(初採取)。
- ・2月7日、地下水観測孔 No.2-9 のサンプリングを実施(初採取)。
- ・平成 26 年2月9日採取の護岸地下水および海水については、積雪による影響のため採取できていない。
- ・2月 12 日、地下水観測孔 No.1-13 のサンプリングを実施(初採取)
- ・2月 13 日、地下水観測孔 No.1-13 のサンプリングを実施(再採取)

【その他】

[平成 26 年]

・現時点で特記事項なし。

1～4号機サブドレン観測井調査関連

- 1～4号機建屋に隣接している井戸(サブドレンピット)の浄化試験をした結果、ピット内の溜まり水から放射性物質が検出されており、その流入経路としてフォールアウトの可能性があることから、新たに1～4号機建屋周辺に観測井を設置し、フォールアウトの影響について確認することとしている。

【サブドレン観測井のサンプリング結果】

[平成 26 年]

- ・今回新たに設置した2号機原子炉建屋(山側)のサブドレン(N8)のガンマ核種、全ベータ、トリチウム(1月 14 日採取)の分析を実施。
- ・今回新たに設置した2号機原子炉建屋(山側)のサブドレン(N7)のガンマ核種、全ベータ、トリチウム(1月 23 日採取)の分析を実施。

その他

【その他設備の不具合・トラブル】

[平成 25 年]

- ・10 月3日午前9時 53 分、屋外にある6号機残留熱除去系海水ポンプDを定例の確認運転のため起動したところ、当該ポンプのモータを冷却する配管から海水が鉛筆の芯1本程度漏えいしていることを、同日午前9時 57 分に当社社員が発見した。当該ポンプを直ちに停止し、漏えいは停止。なお、原子炉の冷却は、残留熱除去系ポンプBおよび残留熱除去系海水ポンプBにて継続中。現場の調査を行ったところ、当該配管に1mm程度のピンホール

が確認された。なお、海水の漏えい量は約1Lと判断している。

その後の調査により、当該配管内面に貝等の海生物が付着する等により傷が付き、その部位に海水が停留する等により孔食が発生進展し、漏えいに至ったものと推定。

当該配管の交換を実施し、平成26年2月14日午前11時50分、漏えい確認を行い異常がないことを確認。

- 11月23日午後3時57分頃、福島第一原子力発電所1～3号機の原子炉压力容器および原子炉格納容器へ窒素を封入している窒素ガス分離装置2台(A, B)が運転中のところ、「ドライヤ異常過電流またはドライヤ高圧カット」の警報が発生し、窒素ガス分離装置1台(A)が停止。もう1台の窒素ガス分離装置(B)は運転を継続しており、原子炉格納容器および原子炉压力容器内への窒素供給は継続中。また、プラントデータ(原子炉格納容器内水素濃度・原子炉格納容器内温度等)、モニタリングポストの値に有意な変動は確認されていない。

待機中の窒素ガス分離装置(C)については、同日午後5時3分に起動し、同日午後5時12分に窒素ガス分離装置2台(B, C)による窒素供給を開始。起動後の運転状態に異常はない。

その後、窒素ガス分離装置(A)の停止要因(電気的要因、機械的要因)について調査を実施し、ドライヤ用コンタクタの動作不良が原因と判明したことから、コンタクタを新品へ交換しドライヤファン単体動作試験を実施して良好であることを確認。本試運転時にメインファンが起動しない事象が発生し、ファンインバータに何らかの異常があることが確認されたことからファンインバータの交換を実施。平成26年1月16日、試運転を行い異常のないことを確認。なお、現在、窒素ガス分離装置はB, C運転中でAは待機状態。

- 12月18日午後10時20分頃、協力企業作業員がFエリアタンク(5, 6号機北側)のパトロールを実施していたところ、C5タンクとC6タンク連絡管(C5タンク側)のフランジ部(継手部)より水が約1分に1滴ほど滴下していることを発見。滴下を発見した際、パトロール員が確認した滴下の範囲は約30cm×約5cm×約1mm(厚さ)で、堰内に止まっており海への流出はなく、当該継手部はビニールでの養生を実施。

12月19日午前0時48分に当該継手部の増し締めを実施したが、滴下量に変化なし。その後、C5タンク内水の移送を12月19日から12月24日まで実施し、当該フランジ部を目視点検した結果、同日午後0時45分、漏えいが停止したことを確認。推定原因および対策は以下の通り。

<推定原因>

- タンク側ゴムリング接続面の発錆(腐食)により僅かな隙間が発生し、微少リークに至ったと判断。

<対策>

- 接続面の手入れを行い、コーキング材の塗布を実施し、また、内部ゴムリングの交換を実施。

12月26日、当該継ぎ手部の補修後の漏えい確認を行うためにC5タンクに水張り(5, 6号機タービン建屋地下滞留水)をしたところ、午前11時頃にC5タンクの水平フランジ部(下から一枚目の側板と二枚目の側板の間)より3秒に1滴程度、水が漏えいしていることを当社社員が発見。なお、漏えい箇所の下には漏えい確認のためシートにて養生しており、堰内床面には漏えいした水は滴下していない。また、漏えいを確認した際、C5タンクの別の箇所(1箇所)において、水のにじみを確認。その後、C5タンク内の水をC6タンクへ移送し、午後2時15分当該水平フランジ部からの漏えいおよびにじみが停止していることを確認。

また、当該水平フランジ部の漏えい箇所付近のボルトに損傷があることを確認。

平成26年2月14日午前10時44分、漏えい確認を実施し、異常がないことを確認。推定原因および対策は以下の通り。

<推定原因>

- 水平フランジボルトの穴開け不良によりボルト穴の芯ずれが生じ、組立時に芯ずれを矯正して挿入した結果、ボルトが変形し、締め付け不良から面圧が低下し、漏えいに至ったものと推定。

<対策>

- 漏えいの確認された箇所を含む、フランジ締め付けの面圧不足が懸念される締め付け不良ボルトおよび腐食が確認されたボルトについて交換を実施。
- 芯ずれが確認されたフランジ部ボルト穴の拡張加工を実施。
- 内面フランジ接続部全てにシール処理を行い、タンク内全面に塗装を実施。

[平成26年]

- 1月9日午後2時5分頃、3号機原子炉建屋1階北西エリアにおいて、ガレキ撤去作業にて使用している遠隔操作の無人重機[ASTACO-SoRa(アスタコ・ソラ)]より作動油が漏えいしていることを協力企業作業員が発見。当該重機を停止したことにより、漏えいは停止している。なお、漏えい量は、約10cm×約10cm×約1mmの範囲(2箇所)であり、同日午後2時25分に双葉消防本部へ連絡。

その後、漏えい状況および原因を調査を実施したところ、当該重機の右手アーム回転用油圧ホース継手部からの漏えいであることを確認。1月10日、漏えい箇所の分解を実施した結果、継手部の緩みを確認。漏えいに至った原因は、作業によるアーム動作により、油圧ホースも追従する構造となっており、アームの繰り返し動作により継手部に負荷がかかり、徐々に継手部が緩んできたことと推定。対策として、当該継手部の清掃、締付け、および類似継手部の締付け確認を行うとともに、当該重機の使用の際の始業前点検においては、継手部の緩みがないことを確認する。なお、漏えいした作動油については、別の小型重機で油吸着マットを使用して拭き取りを完了。

- 1月17日午前9時頃、福島第一原子力発電所構内においてサブドレン浄化設備建屋設置工事の地盤改良に使用しているコンクリート圧送車から、制御油が地面に滴下していることを、協力企業作業員が発見した。漏えいした制御油については、プラスチックの容器に受けた後、制御油の元弁を全閉とし、同日午前9時45分頃、漏えいは停止した。プラスチックの容器に受けた油の量は約5リットルであり、また、地面上(砂利)に直径10cm程度の滴下跡を確認したため、吸着マットにて処理を行っている。本件について、同日午前10時9分、双葉消防本部へ連絡している。また、現場の状況等について、現在調査している。

同日午後4時45分、双葉消防本部にて危険物の漏えい事象扱いであると判断された。なお、今回の油漏れの原因は、車体下部にある油配管ジョイント部耐圧ゴムホースの劣化による制御油漏れであると判断。また、プラスチックの容器に受けた油の量は約5リットルで、制御油系統内に残留した油の回収分を含むものであり、地面上(砂利)に染み込んだ油約240ccについては、当該箇所の砂利を除去し、回収している。

- 1月21日午後0時10分頃、福島第一原子力発電所5, 6号機西側道路において、協力企業のトラックがハンドルを取られて飲料水配管に接触し、飲料水が漏えいしていることを当社社員が確認した。破損した飲料水配管の取替作業を行うため、同日午後0時50分に飲料水供給元弁を閉止した。その後、破損した飲料水配管の取替作業が終了したことから、午後1時25分に飲料水供給元弁を開とした。なお、けが人は発生していない。

- 1月23日午後1時50分頃、構内の企業棟脇に仮置きしていた重機から滴下した油をパトロール中の当社社員が発見した。漏えい範囲はアスファルト上に約50cm×約50cmであり、油の滴下は止まっている。午後2時55分、双葉消防本部へ連絡。

1月24日午後4時35分、双葉消防本部にて危険物漏えい事象と判断。

なお、当該の滴下箇所については、吸着マットで拭き取りを実施したうえで中和剤を散布し、油の滴下は止まっているが、念のためオイルパンを設置。

- 1月29日午前10時40分頃、運用補助共用建屋1階において、所内共通ディーゼル発電機(D/G)B(現在点検停止中)に燃料を供給する燃料タンク関連の機器より軽油が漏えいしていることを当社社員が発見した。発見後、直ちに軽油配管の弁を閉止したところ、漏えいは停止。福島第一原子力発電所内の電源供給については、外部電源からの供給に加え、所内共通ディーゼル発電機(D/G)Aが待機状態であることから、問題なし。漏えいした軽油は、ドレンパン(約40cm×約60cm×深さ約2cm)からあふれ、コンクリート床面に約4m×約2m×深さ約1mmの範囲で溜まっていた。本件については、午前10時51分、双葉消防本部へ連絡。その後、軽油漏えい箇所は、所内共通ディーゼル発電機(D/G)Bの軽油ライン燃料フィルタ(運用補助共用建屋1階西側に設置)の空気抜きラインであることがわかった。漏えいした軽油については、午前11時48分から午後0時41分にかけて、吸着マットによる拭き取りを実施し、終了。本件については、午後1時6分、双葉消防本部より「危険物漏えい事象」であると判断された。

原因については、1月29日の所内共通ディーゼル発電機(D/G)Bの燃料タンク点検を行うための軽油抜き準備作業において、燃料タンク出口弁を開けた際に燃料フィルタ空気抜きラインより軽油が漏えいしており、その後の確認において、通常閉状態である燃料フィルタ空気抜きラインプラグが開状態であったことから、漏えいしたことが判明。なお、通常閉である当該プラグが開いていた原因については、現在調査中。

その後、原因と再発防止対策をとりまとめたところ、当該燃料フィルタより軽油を採取した後の空気抜きラインの締め付け不足により、通常閉である空気抜きラインが微開な状態になっていたことが原因であった。また、当該の空気抜きラインのプラグは当該フィルタに直付けであったことから、配管系統図等に記載がなく、ライン構成時の確認管理対象外であったことと、作業範囲や工程が従来と異なっており、作業範囲を誤認しやすい状況であったことを確認した。対策として、このように機器に直付けされた弁等のうち、系統の境界を構成するものは配管系統図等に反映し、作業用管理札(タグ)の管理対象とする。さらに、配管系統図での作業範囲の確認に加え、工事工程表へ作業を指示する範囲と期間を明記して情報を共有する。作業員に対しては、作業指示範囲外の作業禁止について再周知する。

- 1月30日、1号機原子炉建屋1階大物搬入口付近にあるホースの接続部から水が滴下していることを協力企業作業員が発見し、同日午前9時54分頃、当社に連絡。現場確認の結果、1号機使用済燃料プールのスキマサージタンクにろ過水を補給するために設置している消防ホースの接続部からの滴下であり、滴下水はろ過水であることを確認。滴下は1秒に2滴程度で、滴下した水は当該接続部の下に設置した容器で受けており、容器外への漏えいはない。

その後、ろ過水を供給しているホースの水抜きを実施し、同日午前10時46分、滴下は停止。なお、1号機使用済燃料プールの冷却に影響はない。当該のろ過水を補給するための系統は、常時使用している系統ではなく、スキマサージタンクの水位が低下した際にろ過水を補給するための系統である。

- 2月6日午前8時50分頃、福島第一原子力発電所登録センター1階の火災報知器が発報したことから現場を確認したところ、同センター内の機械室から水が出ていることおよび2階で発煙があることを協力企業作業員が発見。同日午前9時10分、消防へ通報。なお、モニタリングポストおよび構内ダストモニタの値に有意な変動はなく、けが人は発生していない。現場確認の結果、登録センター内機械室の空調設備のヒータリングコイルが破損し温水が漏れた影響で、湯気が発生していることを当社社員が確認。当該コイルの通水元弁を閉に

し、同日午前10時14分、温水の漏えいが停止。機械室内の雰囲気線量は、 $3.0\mu\text{Sv/h}$ であり、床面等からは汚染は確認されていない。

その後、消防による現場確認の結果、火災報知器の警報発報については、同日午前10時45分に、消防から「これ以上の災害に発展する恐れはない」と判断された。

その後、2月7日午前11時20分に火災発生有無の調査のため、富岡消防署立会のもと、機械室の空調設備のモータ分解点検を実施。その結果、ヒータリングコイルの破損による蒸気によって火災報知器が動作したものと推定され、火災ではないと判断された。

- 2月6日午前10時50分頃、5、6号機北側のFタンクエリアに設置しているAタンクとBタンク(A、Bタンクともに、5、6号機タービン建屋地下滞留水を貯水)の間にある流量調整弁と逆止弁間のフランジ部より、水が鉛筆1本程度の太さで漏れていることを当社社員が発見。漏れた水は堰内に留まっているが、一旦ビニール袋での養生を実施。なお、モニタリングポストの指示値に有意な変動は確認されていない。

その後、AタンクからBタンクへの移送配管のAタンク側出口フランジ接合部を切り離して配管内の残水を抜いたことにより、同日午後0時8分、フランジ部からの漏えいが停止。

漏えい量は、漏えい範囲が約2m×約2m×厚さ約1mmであること(約4リットル)、ビニール袋等で漏えい水を受けた量が約74リットルであることから、総量約78リットルであることを確認。

漏えい停止後に目視にて漏えい部を確認したところ、ガスケットの損傷が見られたことから、当該ガスケットを交換。漏えいの原因は凍結によるガスケットの損傷と考えている。その後、当該漏えい部および通水ラインの水張りを行い、漏えいがないことを確認し、2月10日、滞留水の移送を再開した。

- 2月6日午前11時5分頃、淡水化处理した淡水を原子炉注水用のタンク(バッファタンク、復水貯蔵タンク)へ移送する配管の途中に設置されている、異物を除去するストレーナの圧力指示計より水が漏えいしていることを作業員が発見。圧力指示計の元弁を閉めたことで漏えいは停止。漏えいした水は、原子炉注水に使用する淡水化处理後の淡水であるが、淡水化处理した後に原子炉注水として再利用する配管には問題はなく、原子炉注水用のタンクへの水補給および原子炉注水への影響はない。

漏えい水については、地面に染み込んでおり、水の全ベータ放射能濃度を測定したところ至近の放射能分析結果(昨年12月10日採取)より $2.8\times 10^3\text{Bq/L}$ であることを確認。このことから、本件については、同日(2月6日)午後3時6分に東京電力株式会社福島第一原子力発電所原子炉施設の保安及び特定核燃料物質の防護に関する規則第18条第12号「発電用原子炉施設の故障その他の不測の事態が生じたことにより、核燃料物質等(気体状のものを除く)が管理区域内で漏えいしたとき。」に該当すると判断。なお、漏えい水量は流量計指示値の変化量から約600リットルであると推定されることから、漏えい水の全ベータ放射能量は約 $1.7\times 10^6\text{Bq}$ であると推定。漏えい水は地面に染み込んだが、染み込んだ土壌を回収(掘削部は $1.8\text{m}\times 2\text{m}\times 0.3\text{m}$)し、当該地面の表面線量当量率(γ 線+ β 線)が 0.24mSv/h から 0.018mSv/h に低減。さらに、漏えい水は土のう外に流出していないことから海への流出はないものと判断。漏えいの原因は圧力指示計内部の水の凍結により、ボンネット部から漏えいが発生したものと推定。対策として、当該圧力指示計にヒーターを取り付ける予定であり、今後、当該圧力指示計の交換を行う予定。

- 2月10日午前11時30分頃、5・6号機北側のFタンクエリアにおいて、5・6号機地下滞留水を浄化した構内散水用の水を、散水車へポンプで移送していたところ、ポンプから水が漏れいしていることを当社社員が発見。漏れた水は堰内の鉄板上に留まっており、漏えいは停止していることを確認。その後現場を確認したところ、当該ポンプのケーシング部が凍結の

影響により破損し、漏えいが発生したものと推定。当該ポンプについては交換を行う。
なお、漏えい量については、破断面積と流出時間より、約 20 リットルと推定。また、漏えい水の過去の分析結果は以下のとおり。

- ・セシウム 134: 検出限界値未満(検出限界値: 1.4×10^{-3} Bq/cm³) [平成 26 年 2 月 6 日採取]
 - ・セシウム 137: 2.9×10^{-3} Bq/cm³ [平成 26 年 2 月 6 日採取]
 - ・全ベータ: 検出限界値未満(検出限界値: 1.4×10^{-2} Bq/cm³) [平成 25 年 11 月 8 日採取]
- ・2月 11 日午前 11 時 25 分頃、免震重要棟南側にある免震棟へ飲料水を送る配管の凍結防止用配管に設置している小弁より飲料水が漏れていることを当社社員が発見。午後 0 時 35 分頃、当該弁の交換を実施し漏えいは停止。漏えいの原因は、当該弁を閉運用としていたため、凍結により破損し漏えいが発生したと推定。
- ・2月 15 日午後 0 時 45 分頃、福島第一原子力発電所高台にある原子炉注水用バッファタンクエリア堰内に、溜まった雨水を仮設水中ポンプにてバッファタンク内へ移送していたところ、移送配管の接続部より漏水していることを、当社社員が監視用カメラ映像で発見。漏えいした水は、コンクリート面に土のうを積んだエリアに溜まっている。
同日午後 0 時 59 分に仮設水中ポンプを停止し、漏えいは停止。
今回の水の漏えいに伴う原子炉注水への影響はない。
バッファタンク水位を確認したところ、有意な変化が無かったことから、タンクの水が当該堰内に漏れた可能性は無いと考えている。
また、本日採取したバッファタンクエリア堰内水(漏えい水)の分析結果について、2月 11 日に採取した当該堰内水分析結果と有意な変化が無かったことから、当該堰内水(漏えい水)は雨水であると判断。

漏えい量は、仮設水中ポンプ移送流量(約 1.1m³/h)と移送時間(約 1.5 時間)より、約 1.7m³と推定。

- ・2月 16 日午後 10 時 51 分頃、3号機タービン建屋1階にあるタービン建屋補機冷却系ポンプエリアの漏えい検知器が動作したことを示す警報が発生。現場を確認したところ、当該エリア漏えい検知器周辺に約 20m×約 30m×高さ約3cmの水溜まりがあることを確認。当該エリア周辺にある機器・配管等から水の流れ込みがないこと、3号機の関連パラメータに異常がないことを確認している。
- 過去の現場状況を確認した結果、2月 12 日に実施したパトロール(2週間に1回実施)にて、当該エリア近傍の東側壁上部にあるルーフドレン(雨水排水用)配管に裂け目があり、その裂け目部より雨水が流入していることを確認しており、また、当該エリアでは、震災以降、これまでも雨水等が床面に溜まっている状況が確認されている。なお、漏えい検知器動作後の現場確認においては、ルーフドレン配管の裂け目部からの雨水の流入は確認されていない。
- 以上のことから、漏えい検知器が動作した原因は、先日の降雨・降雪等の影響により3号機タービン建屋の屋上に溜まった雨水(雪解け水)が、建屋内ルーフドレン配管を通過して裂け目部より流入し、当該エリア床面に溜まったものと推定している。
なお、水溜まり箇所の線量当量率測定および分析結果については以下のとおり。

水溜まり箇所の雰囲気線量率(水面より約 1.2mの高さ)

- ・1cm線量当量率(ガンマ線): 0.040 mSv/h

- ・70 μ m線量当量率(ベータ線): 0.000 mSv/h

水溜まり箇所の表面線量率

- ・1cm線量当量率(ガンマ線): 0.035 mSv/h
- ・70 μ m線量当量率(ベータ線): 0.000 mSv/h

水溜まりのない箇所の雰囲気線量率(当該エリア近傍で床面より約 1.2mの高さ)

- ・1cm線量当量率(ガンマ線): 0.060 mSv/h
- ・70 μ m線量当量率(ベータ線): 0.000 mSv/h

溜まり水の分析結果(2月 16 日採取)

- ・セシウム 134: 15,000Bq/L
- ・セシウム 137: 39,000Bq/L
- ・全ベータ: 51,000Bq/L

<参考: 3号機タービン建屋地下溜まり水分析結果(平成 25 年 12 月 6 日採取)>

- ・セシウム 134: 7,300,000Bq/L
- ・セシウム 137: 18,000,000Bq/L
- ・全ベータ: 57,000,000Bq/L

溜まり水の分析結果において放射性物質が検出された理由としては、タービン建屋屋上の雨水が汚染を含みながらルーフドレン配管を通過して裂け目部から流入したこと、流入した雨水が当該エリア床面等の汚染を含みながら水溜まりになったこと等が原因であると推定している。

ルーフドレン配管の裂け目部については、今後止水処理を実施する。

【けが人・体調不良者等】

[平成 26 年]

- ・1月 20 日午後 0 時 30 分頃、2号機原子炉建屋で全面マスクを着用して除染作業を行っていた作業員が、休憩のために1、2号機サービス建屋休憩所で汚染検査を受けたところ、顔面(頬)および口内が汚染していることを確認。ただちに当該作業員の顔面および口内に付着した放射性物質の除染を行い、同日午後 3 時 14 分に入退域管理施設での体表面モニタ測定を終えて、福島第一原子力発電所を退域し、Jヴィレッジでのホールボディカウンタ(全身測定)*を受検した。ホールボディカウンタの結果、50 年間に受ける放射線の量は 0.38 mSv と評価され、問題のないことを確認。また、医師による診断(問診)により、異常がないことを確認。当該作業員の顔面および口内に放射性物質が付着した原因は、当該作業員が現場作業において全面マスクのガラス内側が曇ったことから、全面マスク内に指を差し込み、曇りを拭き取ったために起きたものと考えている。

*: 体内にある放射性物質を体外から測定する放射能測定装置。

【その他】

[平成 26 年]

- 低気圧による荒天が予想されることから、物揚場復旧工事に使用しているクレーン船を取水路開渠内に待避させるため、2月8日午前8時45分から午前9時15分にかけて、1～4号取水口付近に設置したシルトフェンスの開閉を実施。

以 上